

ひがしの

10月号 東野小学校報 No.7

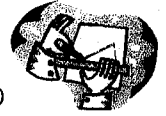
読書の秋、勉強の秋 校長 青山龍三

先日18日の運動会は、暑い中、子ども達の気概に圧倒されました。特に演技種目は、短い期間によくぞあそこまでできるようになったなあ、との思いでした。始めのころの練習を見ていたときには、間に合うかどうか不安ではありましたが、夏休み中に暑いを先生達が懸命に踊りの練習する姿を知っていましたし、練習に取り組む子ども達の一生懸命な姿を見て、間に合うことを確信しました。結果は当日見ていただいたとおりです。練習の力を十分発揮していましたし、また中には、練習ではできなかったことも気合で成功させるところもありました。運動会での子ども達の姿を見ながら、『子どもは鍛えればどれだけでも力が出せる』、私はその潜在能力の高さにも驚いていました。保護者や地域の皆さんにこのような姿を見ていただくことができ、本当によかったと思いました。でも、お家の方や地域の方に見てもらった子どもたちはもっとうれしく感じたと思います。頑張りを認めることで、子どもたちは次への意欲を持ちます。そのよい機会になったと思います。

さて、季節はもう秋です。涼やかな風がああ夏の猛暑を忘れさせてくれます。グラウンドの横の彼岸花も満開です。学校は『読書の秋、勉強の秋』へとシフトしていきます。学校で勉強することは、社会人として豊かに生きていくための基礎といってよいでしょう。学校では知識をいっぱい身につけてほしいと願っています。もちろん考える力も大切ですが、ただ考えさせるだけでは子どもを伸ばすことにならないのです。いかに深く考えさせるか、よりよく考えさせ



るかが問われます。こう考えたとき、知識を多く持つ方がより深く考えられると思うのです。知識というのは、子どものうちはバラバラでなかなかつながりませんが、大人になればつながってきます。だから子どものうちは難しく感じるのですが、そこを何とか乗り切つてほしいのです。やがて知識の点はつながり、線となり、広がりを見せてきます。その、点と点をつなぐのが読書であり体験であり経験なのです。



自分の例で恐縮ですが、中学校で習う、たぶん世界で一番有名な定理「ピタゴラスの定理」のピタゴラスのことです。彼の名は、中学校3年で始めて知りました。以後彼のことを少し調べて、教団を作ったことや奇数と偶数を最初に分類したと言われていたこと、黄金比を深く研究したことや『親和数』について研究していたことなどを知りました。それからずいぶん時間がたった最近、『博士が愛した数式』の中で出てきた『友愛数』がこの『親和数』ということを知り、ただそれだけで興味を持ち、この小説を読む気になりました。

社会科では、地理と歴史、文化をそれぞれ別に習っていたので、地理は地理で、歴史は歴史で覚えようとしていたのですが、そこに生きる人々の暮らしを考えることで、初めて別々に覚えた知識をつなげることができ、総合的に理解できたことを覚えています。



これからの季節は勉強するには絶好の時期です。覚えたことは時間がたてば忘れるものですが、苦勞して覚えたことは忘れるまでに時間がかかります。だから繰り返し勉強することが大切なのです。また、知識をつなぐ読書にも集中できると思います。大人も子どももテレビやゲームから少し離れて、久しぶりに『ノーテレビ』に取り組んでみてはどうでしょう。